

# 国語科学習指導案

八尾市立八尾小学校  
指導者 坂野 恭平

1. 日 時 令和6年11月22日 第5時限 14:00~14:45  
2. 場 所 第4年1組教室  
3. 学年・組 第4学年1組(31名)  
4. 単元名 「未来につなぐ工芸品」  
教材文:「未来につなぐ工芸品」大牧圭吾(光村図書)

## 5. 単元目標

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
<ul style="list-style-type: none"><li>・事典の使い方を理解し使うことができる。【(2)イ】</li><li>・幅広く読書に親しみ、読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気づくことができる。【(3)オ】</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫することができる。</li></ul> <p>【B書くこと(1)ウ】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えを持つことができる。</li></ul> <p>【C読むこと(1)オ】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約することができる。</li></ul> <p>【C読むこと(1)ウ】</p>	<ul style="list-style-type: none"><li>・言葉が持つよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。</li></ul>

## 6. 本単元で取り組む言語活動

- ・伝統工芸品を紹介するCMを作る。(映像と原稿400字(1分間)程度)

## 7. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"><li>①事典・辞典の使い方を理解し使っている。【(2)イ】</li><li>②幅広く読書に親しみ、読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気づいている。【(3)オ】</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>①自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫している。【B書くこと(1)ウ】</li><li>②文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えを持</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・積極的に、中心となる語や文を見つけて要約したり、自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、学習の見通しをもって、</li></ul>

	っている。【C読むこと(1)オ】 ③目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約している。【C読むこと(1)ウ】	書き表し方を工夫したりして、調べて分かったことをまとめて書こうとしている。
--	--	---------------------------------------

## 8. 指導にあたって

### (1)児童観

本学級の児童は、朝読書の時間には積極的に本を読む児童が多い一方、数名の児童は何を読んでもいいのか困っている様子で、字の細かい本を苦手としている児童もいる。そのような児童は、図書時間に図書室に行っても何を読んだらよいか決めあぐねている様子が見られる。反面、月に1回金曜の朝に行われる読み聞かせの時間（ポコの会）には、楽しそうに物語に耳を傾けている。このことから、お話自体には興味があるが、読書の習慣がいまいちついていないように感じる。また、書く力についても同様で、積極的に書こうとはするが、書きなれていないために、伝えたいことが分かりにくい文章になりがちである。

1学期、双括型の文章を学習するうえで、既習の説明文（1年「くちぼし」2年「たんぽぽのちえ」3年「すがたをかえる大豆」「こまを楽しむ」）の文章構成を復習した。双括型の効果を感じてほしいという思いから、4年生で初めて扱う「アップとルーズで伝える」では、既習の説明文と比べることで、「問い」が生まれるきっかけを作った。また、同じ文章構成のプレ教材「思いやりのデザイン」を学習し、対比・双括型を学んだ。さらに、七段落の必要性を問うことで、説明文をより詳しく読み取る授業を展開してきた。学習の最後には、「すがたを変える大豆」を双括型で書き換える活動をする中で、「読み手」から「書き手」の立場に意識を変えるようにした。それは、筆者がなぜこのような書き方をしたのかを「書き手」の立場から考えさせたかったからである。そうすることで文章に対する理解度もさらに深いものになった。

これらのことをふまえ、まずは読書の習慣化をめざし、現在学習している内容と関連のある書籍をクラスにお勧めの本として掲示することを始めた。イーゼルに立てて毎週更新していくことが何を読んでもいいかわからない児童の指針になると考えた。すると、授業中にも本で得た知識を披露する児童も出てきて、紹介した本を取りあうようにして読む様子が見られた。

また、文章を書くことに対する苦手意識を無くしていくために、日直の1分間スピーチでは原稿を書くようにした。日直のスピーチは400字で、自分の意見を双括型で書いて話すようにした。さらに、どの教科においても観点を持たせて授業のふりかえりを行うことで、毎日書く習慣をつけてきた。このようにして、書くことに対しての苦手意識を無くしていった。今までは思い付きで話すだけのスピーチや感想だけのふりかえりに、国語の力をつけさせる手段としての意味を持たせていった。最初は難しそうにしていた児童も、だんだんと書くことになれていき、自分の考えや思いを文章に表せるようになってきた。

本単元の学習活動を通して、言葉のもつよさに気付き、読書を通して必要な知識を得るよろこびに気付いてほしい。また、「読むこと」で学んだことを「書くこと」でいかす経験を積み、生きた力として身につけさせたい。

## (2)教材観

本教材は、今年度からの新教材である。日本の伝統工芸、伝統文化、さらには伝統的な生活様式への気づきや知識を得ることだけでなく、E S D（持続可能な開発のための教育）やS D G s（持続可能な開発目標）の観点とも深く関わるといえる。気候変動などを背景に持続可能性が重視される昨今の社会にとって、非常に大切な示唆を与えてくれるものである。

教材は、双括型の説明的文章である。全体を通して、「工芸品を未来の日本に残していきたい」「多くの人に工芸品のよさと職人がこめた思いを伝えていきたい」という筆者の考えを伝えるために、奈良墨や南部鉄器などの具体的な工芸品の例を用いながら述べられている。文章構成は、「はじめ」…一、二段落、「中」…三～六段落、「終わり」…七段落となっている。三・四段落では、奈良墨や南部鉄器の工芸品のよさについて説明されている。五段落では三・四段落の中まとめ、六段落では職人がこめた思いについて、七段落では筆者の主張のまとめが書かれている。

六、七段落がなくても五段落の中まとめが二段落の筆者の主張を繰り返す形になり、4年生で学習した「アップとルーズで伝える」の説明文の形「双括型」になっていることにも気付くだろう。つまり、五段落までだけでも話は完結しているのだが、六、七段落で筆者が読者に訴えかける思いがあることで、この説明文はさらに深みを増している。

4年「アップとルーズで伝える」には、この六、七段落にあるような筆者の強い思いはなかった。今回の教材を通して、説明文というものが物事の説明だけでなく筆者の「こうしてほしい、こうあってほしい」という強い思いを伝えるものであるということを学ぶことができる。そして、今回のような書き方を身に着け、今後人に何かを伝えたいときに活用できる力をつけてほしい。

## (3)指導観

単元としては「読むこと」と「書くこと」の二つの領域にわたる指導事項を中心にした複合単元である。「中心となる語や文を見つけて要約」し、その学習内容を踏まえて「理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫」して、興味のある工芸品について本来はリーフレットを作る活動を行う。しかし、今回は「要約」の必然性を持たせるため、書き手の立場になって「伝統工芸品を知ってもらうためにCMを作る」活動に変更する。

第一次では、六、七段落のない本文を読み、筆者の書きぶりや筆者の主張について初発の感想を書き、学習の見通しを立てる（問いをつくる）。読むことに困難を示す児童が多いことから、教師主導で読み取りを進めていくのではなく、ゴールを定め（CM作り）、教材に対する問いを持たせ、それを解決していく方式で読み取りを進めていく。多くの児童は1学期に学習した「アップとルーズで伝える」と同じ双括型であることに気づくと予想されるが、比較して考えやすいように1年生から4年生までの説明文をそれぞれ1枚にまとめたものをまとめたものを配布しておく。その際には、筆者の書きぶりから筆者の強い思いを捉えることができることを押さえておきたい。また、問いを見つけるための話し合いを計画的に設定し、互いの意見や考え方を取り入れられるようにした。その中で、本当に五段落が終わりなのかについて違和感を抱く児童もいるだろう。この違和感を解決するために、第二次で本文を読み進めていく。

第二次では、第一次で出た児童の問いを解決する形で学習を進めていく。こちらの予想する問

いとしては、「双括型なのか」「いままでの説明文との構成の違いは何か」という構成に関するものと「筆者の主張は何か」、または「他の伝統工芸品は何があるのか」「日本の伝統文化にはなにがあるのか」という本文の内容についてやその他の伝統工芸品についてに関するものの三つが考えられる。第二次では、構成に関するものと、本文の内容から分かる筆者の主張は何かについて学習するようにしたい。その他の伝統工芸品については、第三次で、各々が調べたものを取り上げることで解決する。第一次で出た問いを解決するために、五段落まで読み進めたあと、六、七段落のある本文を提示し、筆者の書きぶりから筆者の強い思いを読み取る（本時）。本教材では、六、七段落にある筆者の主張が題名「未来につなぐ工芸品」に繋がっていることに気付かせたい。また、それだけでなく、児童が伝統工芸とは何かを知り、他の伝統工芸にも興味を持って周りの人に紹介したいという思いを持ってほしい。そのためにも、まずは、本時では六、七段落に書かれている筆者の思いについて考えていきたい。本文の読み取りが終えたら、何度も出てくる語句を中心に本文を要約する。これは第三次の練習を兼ねてのものである。第二次で構成と段落ごとに書いてある内容を丁寧に指導することで、第三次の「書く」活動につながっていくと考えられる。

第三次では、紹介したい工芸品を調べ、資料を探していく。調べる際には、百科事典や図鑑、書籍、インターネット資料から「必要な知識や情報を得る」ことで、それらの使い方や有用性を実感させたい。そのために資料の探し方を全体で確認し、さらに資料を探すことが困難な児童のために、こちらから必要な資料は事前に用意しておく。また、自分の興味を持てる伝統工芸品を紹介するように促し、本教材の筆者のように「これをみんなに知ってほしい」という強い思いを持って「書く」活動に取り組んでほしい。その際、引用、出典元などを記載することを学習させる。

これらの活動を通して、自分の考えを相手に分かりやすく伝えるためには、「理由や事例との関係性」を明らかにしながら、端的にまとめることが大切であるということを学んでほしい。

## 9. 単元の指導と評価の計画（全13時間）◎…記録に残す評価 ○…指導に生かす評価

次	時	主な学習活動	知技	思判表	主体	評価規準・評価方法
1	3	○教材「未来につなぐ工芸品（六、七段落なし）」を読み、学習の見通しを持つ。 ・本文を読み、重要な語句の意味を確認する。（第1時）  ・初発の感想を書く。（第2時）  ・初発の感想を交流し、学習計画を立てる。（問いを持つ）	○	○	○	・国語辞典を使い、語句の意味を調べることができる。（行動観察・ノート）【知・技①】  ・初発の感想を書いている。（記述）【思・判・表②】  ・自分や他人の感想のよさに気づき、問いを持つことができ

		「未来につなぐ工芸品」のCM作りに取り組むことを知る（第3時）				いる。(記述・発言)【主】
2	6	<p>○問いを整理し、解決していく。</p> <p>・文章構成を確認する。(第4時)</p> <p>・筆者の主張とその理由を確認する。(第5時)</p> <p>・六、七段落の内容について話し合う。(第6時、本時)</p> <p>・中心となる語や文を見つけて要約する。(第7時)</p> <p>・要約した文章を読み合う。(第8時)</p>		○	○	<p>・文章構成に分けることができる。(行動観察・ノート)【思・判・表②】</p> <p>・本文の構造を捉え、筆者の主張がどこに書かれているのか気づくことができる。(行動観察・ノート)【思・判・表②】</p> <p>○</p> <p>・六、七段落の内容について理解し、自分の考えを書くことができる。(行動観察・ロイロ)【思・判・表②】</p> <p>◎</p> <p>・中心となる語や文を見つけ、規定字数で要約ができる。(行動観察・ノート)【思・判・表③】</p> <p>○</p> <p>・要約した文章を読み合い、自分の考えを持とうとしている。(行動観察・ノート)【思・判・表②】</p>
3	4	<p>○工芸品についてのCM作りをする準備をする。</p> <p>・紹介したい工芸品を選び、詳しく調べる。(第9, 10時)</p> <p>・原稿を書くための文章の組み立てを考え、理由や事例を挙げて原稿を書く。(第11, 12時)</p>	◎		○	<p>・紹介したい工芸品を選び、そのために必要な情報を集めようとしている。(ポートフォリオ資料)【知・技②】</p> <p>◎</p> <p>・CM原稿に必要な文章構成を意識して要約している。(行動観察・ノート)【知・技①】【思・</p>

	・CMを発表し、交流する。(第13時)	◎	判・表①【主】 ・読み合い、それぞれの文章のよいところに気付いている。(行動観察・ノート)【思・判・表②】
--	---------------------	---	--

## 10. 本時の展開(6/13時間目)

### (1) 本時の目標

「未来につなぐ工芸品」の六、七段落にはどんなことが書かれているのかを考える。

### (2) 本時の評価規準

「未来につなぐ工芸品」の六、七段落にはどんなことが書かれているのかを考えようとしている。【思・判・表②】

### (3) 展開

主な学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
1. 六、七段落を読む。	・六、七段落がある本文を配布し、範読する。	
2. 本時の課題を知る。	・本時の課題を確認する。	
六、七段落について考えよう		
3. 六、七段落に書いてあることについて話し合う。	・黒板に前時までの構成表を貼り、そこに六、七段落を付け足して考えさせる。	【思・判・表②】 (行動観察・ノート)
4. 「全文」か「六、七段落なし」どちらがよいかを選び、理由を書く。	・どちらかを選び、理由を書かせる。	
5. 交流する。	・意見の少ないほうから発表をさせていく。	
6. 振り返りを書く。	・六、七段落から読み取れる筆者の主張を考えさせる。	

### (4) 本時の判断基準

本時における具体的な児童の状況(※本時の評価基準にかかわる場面において)

おおむね満足できる状況(B)	努力を要する状況(C)への支援
・六、七段落の内容について理解し、筆者の主張を考えることができる。	筆者が伝えたいことが書かれているところに線をひくよう促す。